昨日見た夢　またはいつかの妄想

海山ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
昨日見た夢　またはいつかの妄想

【Ｎコード】
Ｎ３９３７Ｚ

【作者名】
海山ヒロ

【あらすじ】
俺の前にいま、見たこともない女がいる。

「イヤ……だめ…」

彼女は泣きそうな顔でふるふると首をふり、自分を抱きしめる手にぎゅっと力をいれ、ふらつきながら後ずさった。

彼の驚愕（前書き）

毎度ブログからの転載です。Ｒ１８ではない……と思います。ふと思いつくままに。

彼の驚愕

俺の前にいま、見たこともない女がいる。

「ダ、メ……いま、触っちゃ……っ」

猫のようなすこしつりあがった目元を薄紅色に染め、か細い声でそう言いながら、彼女は俺の手から逃れようとしている。

「イヤ……」

ここはベッドの上ではない。

うすぐらいどこぞの密室でもない。

俺が彼女を組み敷いて、無理やりコトにおよぼうとしているわけでも、もちろんない。

接待相手を笑顔でタクシーに押し込み、ほっと一息ついた繁華街の、往来のど真ん中だ。

「え……っと」

めずらしく酔っているな、とは思っていた。

先ほどまで同じ接待の席にいたこの同僚は、女といえど社内でも酒豪と呼ばれ、朝まで飲もうともつぶれるはおろか、その立て板に水の営業トークが途切れることすらなかった。

なのに、一軒目の居酒屋で乾杯の生中を飲みほした時点で頬を赤ら

めていたのだ。
体調でも悪いのか。
少々心配になった俺は、できるだけ酒を回さないよう努力はした。
が。
いかんせん今夜の主役、Ａ部長は彼女がすごぶるお気に入りで。
部下たちは俺にまかせ、ほとんど独占状態で差しつ差されつ、２軒目のクラブでは、お姉さんたちをさしおき彼女を横にはべらせ終始ご機嫌であった。

で。

もう一軒と言いかける部長様をなんとかタクシーにねじ込み、部下の皆さまもお帰り頂いて、本日の任務は無事完了。おつかれしたーと伸びをした俺の横で。

「はぁ……」

一秒前まで赤い顔ながらも完璧な営業スマイルをうかべていたはずの同僚が、妙に悩ましいため息とともにふらっと倒れそうになった。

「へ？おい……大丈夫かよ」

支えようと思わず伸ばした手が、スーツの肩に触れた瞬間、

「アッ」

びくりと、彼女がはねた。

で。俺は途方にくれることになったのだ。

5センチヒールのパンプスを危うく踏みしめながら、彼女はなんとか態勢を整えようとしている。
酔っぱらいの千鳥足ともちがう、奇妙なダンス。
いつもはしっかり小脇に抱える営業鞄を足元にほうりだし、俺が触れた左肩を右手でさすり、左手は右肩を――――ようは、自分を抱きしめているような姿勢だ。
まるで痛みでもこらえているみたいに。

「おい……どうした？」

はっきり言って、変だ。
彼女とは仕事の打ち上げや今日のような接待で何度もいっしょに呑んだことがあるが、こんな奇妙な行動をとったことなどない。

「怪我でもしたのか？」

そんなわけないだろうと自らにツッコミつつ、もう一度手をのばした。
と。

「イヤ……だめ…」

彼女は泣きそうな顔でふるふると首をふり、自分を抱きしめる手にぎゅっと力をいれ、ふらつきながら後ずさった。

彼のつっこみと疑問

「イヤ……だめ……」

彼女の泣きそうな顔などいままで見たこともなかったから、反応がおくれた。

ここは確かに居酒屋やクラブやスナックが林立する飲み屋街で、千鳥足のおっさんや大声で笑いあう学生たちが通りすぎちゃいるけれど。

おびえるように首をふり逃げようとする女と、それに手をのばす男はやっぱり目立つようで。

行き過ぎる酔客の視線がいたい。

「おい園田。どうしたんだよ」

とりあえず知り合い同士であることをアピール（誰にだ？）すべく、彼女の名前を呼ぶ。

彼女の放りっぱなしの鞄を拾い上げ、

「気分でも悪いのか？それならはやく帰ろうぜ」

宿泊先のホテルに戻るべくうながす。

「あ……。ごめん。気分は、大丈夫」

俺の手が鞄でふさがり、もう触られないと安心したのか（だって

それが原因としか考えられないだろう？）、彼女がようやく答えた。
その声はあくまでか細く、まるでため息を吐くようだけれど。オフィスの端から端に響くような、いつものはりと迫力なぞ、望むべくもなく。

おいおい。何なんだよ。

よく知っていたはずの同僚の不可解な言動に、イライラがつのったが、俺はともかくタクシーを探した。

まぁいい。本人は否定するが、酔って気分でも悪いんだろ。ホテルに帰って一晩寝りゃ治るさ。

幸いすぐにタクシーが来て、鞄をもったまま片手をあげて呼びとめる。
正直俺だってはやく寝たい。今日は移動も長かったし、ここのところプレゼンの準備で睡眠不足が続いていた。
「まぁ…無事終わってよかったな。商談もまとまったし」
気分が悪いだろうと独りぎめした彼女を先に乗せるべく、なかばひとり言のように言いながら開いた扉の前で待つ。

が。

「お前……ほんとなにやってんの？」

あいかわらず自分を抱きしめるように腕を身体にまわし、彼女はそろりそろりと身をかがめ、ものすごいスローペースでタクシーに乗り込もうとしている。

何度でも言うがここは飲み屋街だ。夜もだいぶ更けたとはいえ、通行人も多けりゃそれを拾おうと待つタクシーも多いわけで。

「ほら、さっさと乗らないと後ろから煽られんぞ」

彼女の奇妙な行動にいいかげんイラついていた俺は、二人分の鞄を座席にほうりこみ、彼女の肩を乱暴につかんで自分ごと座席に押し込んだ。

「――――ッ！」

いいかげんにしてくれ。

「あ、運転手さん。○×ホテルまでお願いします」

息をのむ彼女を見ないふりして目的地を告げ、シートにどっかりもたれかかった。

タクシーは、通行人をよけながらゆっくりと走る。
自分の担当地区ではないので詳しくはないが、行きから考えればホテルまで１０分てところか。
ホテル戻って、とりあえずひとっ風呂あびて、あ～メールチェックは……明日でいいか。

「あ、そういや部長へのお礼メールは…」

ふと思いついて、妙に静かな隣に声をかけると、

「……おい。本当に大丈夫か、お前」

俺が触った、というより押しやった肩をぎゅっと握りしめ、窓に身を押しつけるようにして小刻みに震えながら、彼女が浅い息をはいていた。

彼の確信

え、俺そんなに強く押したか？
すこし焦った。

「おい……」

さっきから肩に触れるたび過剰に反応しているから、実は脱臼（いやでもどこで？）でもしてるかもしれない。
だからとりあえず、肩以外の場所に手をのぼした。

「熱でもあんのか？どっかぶつけたとか？」
「ひゃっ！」

指がそのきれいにカーブを描く頬に触れたかふれないか。
その刹那、彼女はぎゅっと閉じていた大きな目を見開き、奇妙な声をあげて俺をみかえした。

「オイ……」

思わず手をひく。

「あ、ゴメン、…ちょっと……今は、」

触らないで。
ようやく自分の行動を説明する気になったのか、俺が触れたか頬を隠すように手でおおって、彼女が言う。

「あぁ…わりぃ……」

中途半端にのばした手をそろそろと戻し、腕組する。

俺としたことが。いま、ようやく気づいた。

できるだけ距離を取ろうと扉にぴったりへばりつき、すこし力はゆるめたようだがこわばったままの彼女を、改めて見つめる。

おびえ見開かれ、潤んだ瞳。

こきざみに震える身体。

浅い呼吸をくりかえし、開いたままの紅い唇。

酔ったように（いや実際かなり酒は入っているけれど）とろんとした目許。

なにかを耐えるようにひそめられた眉といい、これは……。

「お前さ、酔うと感じやすくなんの？」

沸き上がる悪戯心を押さえかね。俺と彼女の間、たっぷり一人分あいた座席に手をつき身をのりだして、朱くなった彼女の耳に息を吹き込むように、囁いてみた。

「やぁっ……！」

耳をおさえ、怯えたようにこちらをみる大きな瞳。その目尻に浮かんだ涙が、なによりの答えだった。

「なるほどねぇ……」

何故かゆるんできた口元を隠しながら、俺はひとり、呟いた。

同じ時期に途中入社して、はや……3年か。

同じチームに配属されたのは、半年前。それまでも何度かこいつとは仕事で関わってはきた。

俺と同じく根っからの営業人間で、酒に強くてよく喋る。誰かの後をついてくのではなく、自分でさっ　さと道を切り拓き、グループの中ではいつの間にか仕切り役になってしまう。仕事はそつなくさりげなく。社内では社長に対してだろうと物おじしない。

仕事で頼れる同士ではあっても、いままで彼女を、「女」としてみたことなどなかった。

そう。今までは。

「お客さん、着きましたよ」

運ちゃんの声に軽く相槌をうち、さっさと清算をすませた。
座席の床に放ったままの鞄ふたつを忘れずつかみ、先に降りる。

「どうした？はやく降りろよ」

開いたタクシーの扉に手をかけ、もはやにやけた顔を隠すことなく、赤い顔でまだ耳を押えたままの彼女を見下ろす。

今夜はまだ眠れそうにない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3937z/

昨日見た夢　またはいつかの妄想

2011年12月15日22時48分発行